

シードブック

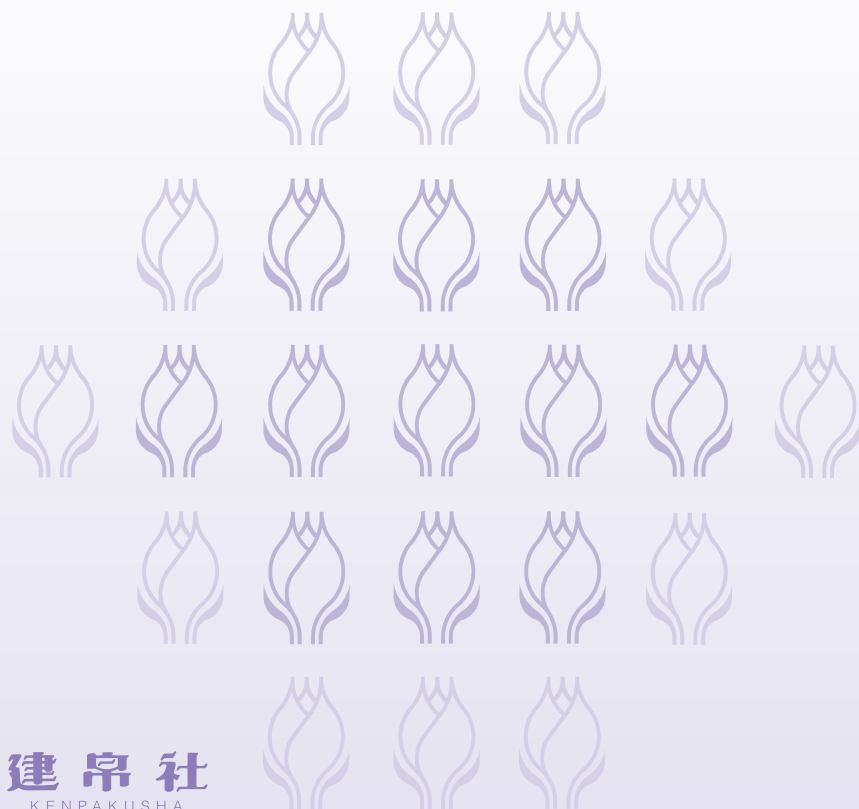
子ども家庭支援の心理学



本郷一夫・神谷哲司 編著

角張慶子・吉中 淳・中村 修・加藤道代・足立智昭・大野祥子

野澤義隆・中村強士・佐藤奈保・佐藤幸子・三浦主博 共著



建帛社
KENPAKUSHA



は し が き

子どもは社会に生まれ、社会の中で育つ。その中で子どもにとって最初に出会う最も身近な社会が家庭であろう。家庭の中での保護者やきょうだいなどとのやり取りを通して子どもは発達していく。そのような、家庭における子どもの発達と家族の役割について学ぶことが本書『子ども家庭支援の心理学』の目的である。

この科目は保育士養成課程の見直しに伴う「教授内容の再編等」によって新たに設置された科目であり、従来の「保育の心理学1」、「家庭支援論」、「子どもの保健1」の内容が盛り込まれている。そのため、多様な内容が含まれ、それらを包括的に習得することが科目のねらいとされている。

本書は13章から構成されている。明確な区分が設けられているわけではないが、学びの狙いの観点から内容的には大きく3つに分けることができる。まず、第1章～第3章では、乳幼児期から老年期までの人の発達過程を知ることを通して、生涯発達に関する心理学の基礎的な知識を習得することを狙いとした。次に、第4章～第9章では、現代社会における家族・家庭の意義や機能を理解するとともに、子育て家庭をめぐる現代の社会的状況と課題について学ぶことを狙いとした。さらに、第10章～第13章では、子どもの心身の健康と保健について理解し、子どもの生活環境、子どもの精神疾患や障害、大災害時の子どもの精神的健康などについて学ぶことを狙いとした。

このような意図のもとに企画された本書を利用して、子どもの現在の姿を形づくっている発達や家庭環境を理解し、子どもや子どもを取り巻く人々の発達と健康を支援する保育者・教育者に育ってくれることを願う。

最後に、本書の企画、編集に際して建帛社編集部の方々には大変お世話になった。本書の構想段階から温かく見守り、迅速で適切な対応をしてくださき、ここに心から感謝の意を表したい。

2019年1月

編者代表 本郷一夫



も く じ

第1章 乳幼児期から学童期にかけての発達の特徴	1
1. 乳児期の発達とその特徴	1
(1) 乳児期とは	1
(2) 乳児期の発達の特徴	2
2. 幼児期の発達とその特徴	4
(1) 幼児期とは	4
(2) 幼児期の発達の特徴	5
3. 学童期の発達とその特徴	8
(1) 学童期とは	8
(2) 学童期の発達の特徴	10
第2章 思春期から青年期の発達の特徴	12
1. 思春期と青年期	12
2. 思春期以前の人間関係	13
3. 第二次性徴の開始	14
4. 思春期の親子関係の変化	15
5. 思春期における仲間関係の展開	16
6. 狭義の青年期と心理社会的モラトリアム	18
7. アイデンティティ	19
8. アイデンティティ・ステータス	21
第3章 成人期から高齢期の発達の特徴	25
1. 成人期の発達	25
(1) 成人期の心理社会的危機：親密性、世代性	25
(2) キャリアから成人期をとらえる	26
(3) 社会的・職業的に自立する	26
(4) キャリアを自ら決めていく力を育てる	28

(5) キャリアをマネジメントする	29
2. 高齢期の発達	29
(1) エイジングとはどのような意味か	29
(2) 高齢になっても維持・向上される機能の例	30
(3) 年を取ることへのイメージ	30
(4) サクセスフル・エイジングとは	33
(5) 社会的役割をもつことの意義	34
(6) 人生をまとめる：高齢期の心理社会的危機「統合性」	35
第4章 家族システムと家族発達	37
1. 保育環境と家庭環境	37
2. 家族の構造と機能	38
(1) A君の事例	38
(2) 家族をシステムとしてとらえる	38
(3) 悪循環と問題の維持	39
(4) 家族内サブシステムの考え方	40
3. 家族システムに影響を与えるもの—生態学的システム理論—	41
4. 家族の発達	42
(1) 複雑化、多様化した家族	42
(2) 親からの自立と新婚家庭の形成	43
(3) 乳幼児をもつ家族—子どもの誕生と子育て—	43
(4) 思春期・青年期の子どもをもつ家族—自立と依存のバランス—	45
(5) 子どもの自立期の家族	46
(6) 老年期の家族	47
第5章 親としての養育スタイルの形成過程と世代間伝達	49
1. 日本の子育て環境の悪化	49
(1) 虐待やマルトリートメントの急増	49
(2) 不適切な養育スタイルとその背景要因	50
2. 親としての養育スタイルの形成過程	52
(1) 養育スタイルの形成モデル	52
(2) 親の要因	53

(3) 子どもの要因	54
(4) 社会的要因	55
3. 愛着の世代間伝達	56
第6章 子育て環境の社会状況的变化	62
1. 世帯人数からみた戦後日本の家族の変遷	62
(1) 世帯人数から3つの時期に分けてみる	62
2. 第1期：大家族と地域社会における子育ての時代	63
3. 第2期：高度経済成長における産業構造の変化	64
(1) 都市部への人口集中と核家族における母親の子育て	64
(2) 母性神話の浸透と女性の社会進出	65
(3) 戦後の「核家族化」の正体	66
4. 第3期：家族の矮小化・最小化の時代へ	67
(1) 家族規模の矮小化・最小化と児童虐待	67
(2) 児童虐待の温床を考える	69
(3) 父親の再発見と働き方改革	69
5. まとめ：現代日本社会における子育て家族の諸課題と支援の意味	70
第7章 ライフコースとワーク・ライフ・バランス	72
1. 子育て期のワーク・ライフ・バランス	72
(1) 子育て期というライフステージ	72
(2) 子育て期の男女の就業	72
(3) 子育て期の男女の家庭生活	73
2. ワーク・ライフ・アンバランスとストレス	73
(1) ワーク・ライフ・バランスの希望と現実	73
(2) 家庭役割に偏ることの問題	75
(3) 仕事に偏ることの問題	76
(4) 夫婦関係への影響	77
(5) 多重役割はマイナスか、プラスか	77
3. ワーク・ライフ・バランスをはばむもの	78
(1) 構造的要因：男性中心の職場環境	78
(2) 心理的要因：母性神話が男女双方を縛る	78

(3) 一人親のワーク・ライフ・バランス	80
4. なぜワーク・ライフ・バランスが求められるのか	80
第8章 多様な子育て家庭への支援	83
1. 育児不安をもつ家庭	83
◆支援のポイント〈事例8-1〉	85
2. 育児サポート環境のない夫婦共働き家庭	87
◆支援のポイント〈事例8-2〉	88
3. 孤立しがちな家庭	90
◆支援のポイント〈事例8-3〉	91
第9章 特別な配慮を必要とする家庭への支援	94
1. 貧困家庭	94
◆支援のポイント〈事例9-1〉	96
2. 虐待の疑いがある家庭	96
◆支援のポイント〈事例9-2〉	97
3. 保護者が精神障害や疾病を抱える家庭	98
◆支援のポイント〈事例9-3〉	99
4. 外国にルーツをもつ家庭	100
◆支援のポイント〈事例9-4〉	101
5. 関連機関との連携・協働	101
第10章 子どもを取り巻く生活環境と心身の健康	103
1. 基本的な生活習慣	103
(1) 食 事	103
(2) 排 泄	104
(3) 衣類の着脱	106
(4) 清 潔	107
(5) 睡眠と日常生活リズム	108
2. 事故防止と安全確保	108
(1) 窒 息	110
(2) 気道異物・消化管異物	110
(3) 溺 水	112

(4) 熱 傷 112

第11章 子どもの心と健康 114

1. 子どもの心の健康の基礎知識 114

(1) 子どもの心の健康とは 114

(2) 子どもの心の健康問題の成り立ち 115

(3) ストレスと子どもの対処行動 117

2. 幼児期・学童期にみられる主な精神障害 118

(1) 不安障害 118

(2) 強迫性障害 119

(3) 心的外傷後ストレス障害（PTSD） 120

(4) うつ病 120

(5) 排泄障害：遺尿症、遺糞症 121

(6) その他子どもにみられる障害 122

3. 子どもの心の健康を保つために 125

第12章 障害のある子どもの理解と対応 126

1. 知的障害 126

(1) 知的障害とは 126

(2) 知的障害の原因 127

(3) 知的障害の分類 128

(4) 保育場面での援助 128

2. 発達障害 129

(1) 発達障害とは 129

(2) 自閉スペクトラム症（ASD） 130

(3) 注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害（ADHD） 133

(4) 学習障害（LD） 134

第13章 災害と子ども 136

1. 災害と精神的健康 136

(1) ストレスと精神的ダメージ 136

(2) 心的外傷後ストレス障害（PTSD） 137

2. 東日本大震災直後の子ども 138

(1) 子どもの様子	138
(2) 子どもの遊びの意味	140
(3) 「気になる」子ども・障害がある子ども	141
3. 保護者をめぐる問題	142
(1) 保護者の様子	142
(2) 保護者ができること	142
4. 保育者に求められること	144
(1) 保育者のセルフケアの重要性	144
(2) 大災害に備える保育環境の見直し	145
さくいん	147



第1章

乳幼児期から学童期にかけての発達の特徴

1. 乳児期の発達とその特徴

(1) 乳児期とは

1) 有能な赤ちゃん

乳児期とは、児童福祉法および母子保健法においては生後1歳までの時期を指し、発達心理学的にはおおよそ1歳または1歳半頃までの時期を指す。この時期は胎児期に次ぐ生涯発達におけるスタートの時期である。一般的には「寝ているだけ」「まだ何もわからない」などと無力な存在である**赤ちゃん**としてとらえられることがあるが、実はそうではない。ヒトの乳児は周りからの刺激を受け止めて学習するための感覚器官をもって生まれ、周囲に自ら働きかけることのできる「有能な」存在である。自らのできる方法（泣く・笑う・見つめるなど）で積極的に発信し、また同時に、周囲の環境から学んでいるのである。したがって、子どもの周りには、子どもが働きかけることのできる豊かな刺激や、その働きかけに応答する存在が必要である。保育者はその環境を整え、また、自らがその豊かな環境の一部となり、子どもの発信を受け止め、応じる重要な存在である。

2) 著しい成長・発達の時期

乳児期は、子どもの身長や体重の成長が一生の中でも特に急激で著しい時期である。運動面の発達も目覚ましく、昨日までつかめなかったものをつかむことができるようになっていたり、寝返ることができなかったのに突然寝返るようになり移動していたりと、日々自分の意志でからだを動かすことが可能になっていく時期である。このような、身体面および運動面の発達は、単に大き

くなり移動できるという以上の意味をもつ。これらの発達に伴い、新規の事柄や事物に出会ったり、今まで見ていたのとは違った景色が目映ったりすることによって、子どもの世界は大きく変化をしていく。その世界の変化に伴い、子どもの内面における認知や情動などの多様な側面の発達が、同時に促進されるのである。

(2) 乳児期の発達の特徴

1) 基本的信頼感

エリクソン (Erikson, EH) は、誕生から死に至るまでの心理社会的発達を8つの段階に分け理論化している。その第1段階 (乳児期) の心理社会的危機として課題となるのは**基本的信頼** (対不信) である。基本的信頼とは「他人に関しては一般に筋の通った信頼を意味し、そして、自分自身に関しては信頼に値するという単純な感覚」と定義される¹⁾。これは、「自分のいる世界は安全・安心である、自分は守られている、何かあれば周囲の人は自分を守ってくれるであろう」という感覚である。また「自分はそのように守られるべき価値のある存在である」という感覚でもある。この感覚は、人が生涯にわたり生活をしていく上で支えとなる重要な感覚である。

乳児期の子どもは周囲の大人に守られ、世話をしてもらうことによって自らの生命を維持している存在である。このやり取りは決して一方的ではなく、子どもと大人の相互作用の中で行われる。お腹がすいた、おむつが濡れて気持ちが悪い、眠くて不快である、楽しい気分であるなど、さまざまな場面で子どもは「泣く」「声を出す」「笑う」などの行動で自らの欲求や感情を表現し、発信する。すると、それに周囲の大人が応じ、おっぱいやミルクを与えたり、抱っこをしたり、笑いかけたりするなど、子どもの信号を受け止めた対応をする。その際に物理的なケアのみならず、「お腹すいたね～」「ご機嫌だね～」などといった情緒的な語りかけや表情や、ふれあいが伴うことも重要である。このような日常生活における自然で情緒的な「求めれば与えられる」という受容的やり取りの中で子どもは、「安全・安心であり、守られている」という基本的信頼感を獲得していくのである。

2017 (平成29) 年に告示された「保育所保育指針」²⁾ および「幼保連携型認

定こども園教育・保育要領³⁾においては、乳児保育に関する記載が充実したことが特徴である。その中において、繰り返し「応答的」「受容的」という文言が用いられている。これは特に乳児期に、この基本的信頼の感覚を育むことを意識することが不可欠であることによる。

2) 愛着関係と探索—安全基地—

「求めれば与えられる」という子どもの発信とそれを受け止める大人とのやり取りの中で、子どもは基本的信頼感を獲得していく。その繰り返しの過程では、最初はただ生理的に発していた子どもの発信行動が、自分の要求や感情を伝えるための社会的・心理的なものへとになっていく。その際、その発信に対して特に一貫して適切に応答する身近な人物との間には、情緒的な絆が築かれる。この特定の人との間に築かれる情緒的絆を、**愛着（アタッチメント）**といい、この絆が築かれた関係を**愛着関係**と呼ぶ。他者との愛着の形成は基本的信頼へと通じるものである。

子どもにとって愛着の役割の一つは、探索活動の基盤となることである。愛着関係を築いた相手を「安全基地」として、子どもは生活空間を広げ、また興味・関心を高め、安心した探索活動を行うことができる。何かあったなら必ず保護してもらえするという見通し、安心して戻る場所（＝安全な避難場所、**安全基地**）があるからこそ、子どもは世界を広げていけるのである。

また、愛着の形成において、特に保育の場では、家庭で保護者が子どもに応答するような二者間における素早さや的確さ（**二者関係的敏感性**）のみならず、子ども集団全体に対する共感性など（**集団的敏感性**）も重要であり、両者が同時に機能している場合は、より一貫して安定した愛着関係が築かれるという⁴⁾。これは保育者に求められる高い専門性であるといえよう。

3) 前言語期—言葉の芽を育てる—

「ママ」「ワンワン」「マンマ」などいわゆる「言葉」を初めて話す（初語）のはおおよそ1歳前後である。とすると、この時期の子どもは言葉を話す前の時期といえる。だが、言葉は突然1歳になってから育ち始めるのではない。まだ、話すことができないこの乳児期から、言葉の基礎となる「言葉の芽」が育っているのである。

例えば、「あー」といった発声（**クーイング**）、「バ、バ、バ」などの発声

（喃語）を行うことは、音をつくり出すという練習であると同時に、その音によって周囲の人の注意を引くことができるということを体験し、それによってコミュニケーションの楽しさや、発信の有効性を学ぶことにつながる。また、その他にも、名前を呼ばれるとふりむく、物の名前を言うと持ってくることができるなど、「わかる」ことは「話す」ことの基礎として大事である。さらに、自分の伝えたいことを指さしをして伝える「みて！ わんわんいたよ！」「あれ、とって！」などの行為も、重要な子どもの「言葉（の芽）」である。また、この時期は、子どもと他者、もしくは子どもと物という二者だけの関係（二項関係）から始まり、物を介して他者との関係を結ぶ三項関係（子ども・物・他者）の成立へと移行する時期でもある。子どもが興味をもって眺めているものに大人が視線を合わせたり、子どもの注意を引くように大人が働きかけたりすることによって同じものに注意を寄せる（共同注意）ことができるようになる。その共同注意を基礎として、そのものについてやり取りをするというこの三項関係の成立は、他者との体験の共有を可能とするため、子どもの言葉が育つ基礎として重要な事象であるといえる。

このように乳児期には、周囲の大人との豊かなやり取りによって、コミュニケーションの楽しさを感じ、言葉の基礎を獲得していくことが大切である。

2. 幼児期の発達とその特徴

（1）幼児期とは

1）行動範囲の拡大と発達

幼児期とは、乳児期の終わりであるおおよそ1歳または1歳半頃から小学校就学前までの6歳頃をいう。幼児期の始まりには、身体的発達、移動運動能力の発達に伴い、立つ・つたい歩き・一人歩き……とその移動手段に変化がみられると同時に、探索活動がよりいっそう活発になる。あそこへ行きたい、あそこにあるものが欲しい……などの子どものもつ欲求が、さらなる運動機能の発達を促進し、その身体運動の機能の発達が子どもの探索意欲をさらに増すことにつながっている。自らの身体を自由に動かせることは、「自分のしたいことを達成できる」という満足感から、「自己」が育つ上においても重要となる。